

## モニタリング間隔が5年となる保護林の一覧表（案）

- ア. 遷移の途中段階にある保護林に該当
  - ・ 小川ブナ希少個体群保護林
  - ・ 武尊山シラカンバ遺伝資源希少個体群保護林
  - ・ 栗原川ウダイカンバ遺伝資源希少個体群保護林
  
- イ. 復元を行っている保護林に該当
  - ・ 小笠原諸島森林生態系保護地域
  
- ウ. 保護対象の個体群の持続性に問題がある保護林に該当
  - ・ 八溝山ツガ・ダケカンバ希少個体群保護林
  - ・ 瀬尻ホソバシャクナゲ希少個体群保護林
  - ・ 高尾山モミ希少個体群保護林
  - ・ 火打山周辺ライチョウ希少個体群保護林
  - ・ 雄国沼湿原希少個体群保護林
  - ・ 猫越ウラジロガシ希少個体群保護林
  - ・ 日山ミズナラ希少個体群保護林
  - ・ 木戸川コナラ希少個体群保護林
  
- オ. 鳥獣・病虫害被害が顕著にある保護林に該当
  - ・ 光徳ミズナラ希少個体群保護林
  - ・ 千手ヶ原ミズナラ・ハルニレ希少個体群保護林
  - ・ 西ノ湖ヒメコマツ・シロヤシオ希少個体群保護林
  - ・ 唐沢コメツガ希少個体群保護林
  - ・ 那須街道アカマツ遺伝資源希少個体群保護林
  - ・ 赤谷山スギ遺伝資源希少個体群保護林
  - ・ 富士山六番ブナ希少個体群保護林
  - ・ 浄蓮ウラジロガシ・アカガシ希少個体群保護林

■ キ. その他、短期間で大きな変化が想定される保護林に該当

- ・南アルプス南部光岳森林生態系保護地域
- ・奥鬼怒生物群集保護林
- ・上野檜原シオジ等生物群集保護林
- ・愛鷹山生物群集保護林
- ・富士山生物群集保護林
- ・八丁池・皮子平生物群集保護林
- ・秩父山地生物群集保護林
- ・丹沢山地生物群集保護林
- ・湯滝ミズナラ遺伝資源希少個体群保護林
- ・竜頭の滝カラマツ遺伝資源希少個体群保護林
- ・光徳ハルニレ希少個体群保護林
- ・戦場ヶ原湿原希少個体群保護林
- ・小田代湿原希少個体群保護林
- ・高原山イラモミ希少個体群保護林
- ・茶ノ木平ウラジロモミ希少個体群保護林
- ・諏訪森アカマツ希少個体群保護林
- ・コガネ沢ブナ・イヌブナ希少個体群保護林
- ・川上ツガ・ハリモミ希少個体群保護林
- ・岩岳山アカヤシオ・シロヤシオ希少個体群保護林
- ・京丸山キョウマルシャクナゲ希少個体群保護林
- ・深沢ヒノキアスナロ希少個体群保護林
- ・天丸山ヒノキ・ハコネコメツツジ希少個体群保護林
- ・元清澄山ツガ・ヒメコマツ遺伝資源希少個体群保護林
- ・南房総モミ希少個体群保護林
- ・上佐野スギ・ブナ・イヌブナ希少個体群保護林
- ・安倍峠オオイタヤメイゲツ希少個体群保護林
- ・富士山罅塚ウラジロモミ希少個体群保護林
- ・皮子沢モミ希少個体群保護林
- ・しらぬたの池モミ・スギ希少個体群保護林
- ・寒天モミ希少個体群保護林
- ・長九郎シャクナゲ希少個体群保護林
- ・黄楊の峯ツゲ希少個体群保護林
- ・西丹沢ブナ希少個体群保護林
- ・西丹沢モミ希少個体群保護林

■ ア. 遷移の途中段階にある保護林に該当

区分	保護林名称	過年度モニタリング調査における評価結果概要
希少個体群保護林	小川ブナ 103.51ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小川ブナ群落林木遺伝資源保存林（32.49ha）                      前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保護対象であるブナ、ミズナラ、イヌブナは、下層にも幼木や稚樹が確認されており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</li> <li>・小川ブナ植物群落保護林（67.42ha）                      前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保護対象であるブナが混在する群落は、生育量は少ないものの下層にもブナの幼木が確認されており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</li> <li>・定波シラカンバ植物群落保護林（3.60ha）                      保護対象であるシラカンバは、先駆性樹種であり、前回調査時よりも衰退傾向にあり、今後は、シラカンバが減少し、コナラが優占する林に遷移していくものと考えられる。シラカンバの混生する植物群落としては、良好な状態で維持されていると評価される。</li> </ul> <p>【モニタリング間隔】                      保護対象群落内のシラカンバは、遷移の途中段階にあると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	武尊山シラカンバ遺伝資源 8.60ha	<p>【評価結果：平成26年度モニタリング結果概要】</p> <p>保護林内のシラカンバは、多くのものに樹勢の衰えや枯損が目立ち始めている。当面はシラカンバ林として維持されるものと思われるが、次世代を担うシラカンバの亜高木、低木、稚樹が全く見られず、今後、シラカンバは消失し、他の樹種が優占する林に遷移していくと評価される。また、本保護林に隣接するスキー場・キャンプ場敷地内のシラカンバは、直径が保護林内のものと同程度のため、同時期に成立したものと考えられる。このシラカンバは、下層が整理されているため樹勢が良い。保護林内のシラカンバは、林内に生育する落葉高木との競合が著しいため、光合成量が減少し、枯死に至っているものと考えられる。</p> <p>【モニタリング間隔】                      保護対象群落内のシラカンバは、遷移の途中段階にあると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	栗原川ウダイカンバ遺伝資源	<p>【評価結果：平成26年度モニタリング結果概要】</p> <p>保護林内のウダイカンバは、多くのものに樹勢が衰えている様子はなく、当面はウダイカンバ林として維持されるものと</p>

	11.75ha	<p>思われる。ただし、次世代を担うウダイカンバの亜高木、低木、稚樹が全く見られず、亜高木層以下には、次世代を担う、シナノキ、ミズメなどが控えており、将来的には、他の樹種が優占する林に遷移していくと評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>保護対象群落内のウダイカンバは、遷移の途中段階にあること判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
--	---------	---

### ■ イ. 復元を行っている保護林に該当

区分	保護林名称	過年度モニタリング調査における評価結果
森林生態系保護地域	小笠原諸島 5,578.99ha	<p><b>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>小笠原諸島においては、林野庁・環境省・東京都の各機関が帰化植物や移入植物の駆除対策を精力的に実施しているものの、未だ根絶には至っておらず、小笠原諸島を代表する植生域に設定されている森林生態系多様性調査地点においても、リュウキュウマツやアカギの生育が認められるのが現状である。このため、固有の生態系を保全していくためには、今後も駆除対策を実施していくことが重要であると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>復元を行っている保護林として、モニタリング間隔を5年とする。</p>

### ■ ウ. 保護対象の個体群の持続性に問題がある保護林に該当

区分	保護林名称	過年度モニタリング調査における評価結果
希少個体群保護林	八溝山ツガ・ダケカンバ 29.49ha	<p><b>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>下層にブナ、ミズナラの幼木や稚樹は確認されなかったが、ブナ、ミズナラ、クリなどが混在して優占する冷温帯性林は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ダケカンバは、保護林南西側の尾根上に5個体が生育しているのみである。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>保護対象のダケカンバは、個体群の持続性に問題があると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	瀬尻ホソバシャクナゲ 21.20ha	<p><b>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>保護林内のホソバシャクナゲの生育状態が不良であったため、スギ・ヒノキの間伐により林内に光を取り込み、ホソバシャクナゲの生育を促すための森林施業が平成28年度に実施され、調査プロット全域において、62本のスギ・ヒノキが伐採</p>

		<p>され、光環境が改善された。今後回復していくことが見込まれるものの、前回調査と比較して生育状態に変化は認められていない状況にあると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>保護対象のホソバシヤクナゲは、個体群の持続性に問題があると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	高尾山モミ 4.85ha	<p><b>【評価結果：平成26年度モニタリング結果概要】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大平モミ植物群落保護林（1.57ha） 高木層に多くのモミが生育し、亜高木層以下の各階層にもモミが生育し、モミ林としての更新準備は整っているものと判断される。このため、将来的には、保護対象樹種であるモミは存続し、モミ群落として維持されていくものと評価される。</li> <li>・高尾山モミ植物群落保護林（3.28ha） モミが密度高く生育している林分では、高木層に生育する高齢から老齢のモミに枯損が進行し、また、亜高木層以下はカシ類が支配しており、モミは存在しない。若齢のモミは草本層に稚樹・実生が僅かに見られるのみであり、モミ林としての更新準備は整っていないものと判断される。このため、将来的には、保護対象樹種であるモミは衰退し、常緑広葉樹であるシラカシ、ウラジログシ、アラカシなどがより優勢となり、常緑カシ林へと推移していくものと評価される。</li> </ul> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>保護対象のモミは、個体群の持続性に問題があると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	火打山周辺ライチョウ 826.74ha	<p><b>【評価結果：平成26年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>火打山から影火打の区間は、ライチョウの生息に必要とされる環境が極めて少なく、また、それぞれの要素が距離的に離れており、生息に十分な環境が維持されているとは言えない。焼山はハイマツの樹高が低く、高山ハイデ・風衝草原も広がり、火打山～影火打とは違った環境が形成されている。ライチョウの主要な生息環境となっている可能性があると考えられるが未確認。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>保護対象のライチョウは、個体群の持続性に問題があると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	雄国沼湿原 174.13ha	<p><b>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>本湿原は、保護林台帳からは、再生複合体の見られるよく発達した高層湿原で、ホロムイイチゴ、ヒオウギアヤメなどを多産し、当該地域では特に希少種が多いとされるが、観察が可能な木道沿いは、低木類とヨシの侵入が著しく、低層湿原化、低木林化が進行し、一部には裸地化も認められ、高層湿原的な要素はかなり衰退しつつあるように見受けられる。</p>

		<p><b>【モニタリング間隔】</b> 保護対象の湿原は、個体群の持続性に問題があると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	<p><b>猫越ウラジロガシ</b> 11.28ha</p>	<p><b>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】</b> 本保護林は、高齢級のウラジロガシが優占し、ほぼ常緑広葉樹によって占められた、極相林としての林相を呈している。しかしながら、林床植生の植被率が低く、次世代を担うウラジロガシなどのシイ・カシ類の稚樹がほとんど見られない状況にあり、常緑カシ林としての更新が停滞している状況にあると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b> 保護対象のウラジロガシ等は、個体群の持続性に問題があると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	<p><b>日山ミズナラ</b> 21.13ha</p>	<p><b>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】</b> ミズナラの成木には病虫害もなく、ミズナラ成木は健全に生育しているが、林内には、次世代を担うミズナラの低木・稚樹はほとんど認められていない。また、生育しているミズナラは直径が太く高齢・老齢木であるため側芽による更新もなく、自然状態でのミズナラ林としての更新は難しいものと評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b> 保護対象のミズナラは、個体群の持続性に問題があると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	<p><b>木戸川コナラ</b> 108.23ha</p>	<p><b>【評価結果：平成28年度モニタリング結果概要】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・木戸川コナラ林木遺伝資源保存林（6.58ha） 本保護林は、高齢級のコナラやモミが混生して優占している林相にある。コナラの実生や稚樹はあまり見られず、更新は難しい状態にある一方で、モミは草本層、低木層、亜高木層の各層でも見られ、今後は土地的・気候的極相林をつくるモミを主体とする群落へ遷移していくものと評価される。</li> <li>・木戸川モミ・コナラ等植物群落保護林（101.65ha） 本保護林は、モミ及びコナラの老齢林といった林相にある。毎木調査の結果、コナラに若干の樹勢の低下が見られる一方で、モミの樹勢は良く、後継樹も多く見られるため、今後はコナラが衰退しモミ群落へ遷移していくと評価される。</li> </ul> <p><b>【モニタリング間隔】</b> 保護対象のコナラは、個体群の持続性に問題があると判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>

■ 才. 鳥獣・病虫害被害が顕著にある保護林に該当

区分	保護林名称	過年度モニタリング調査における評価結果
希少個体群保護林	光徳ミズナラ 24.28ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>林床植生にシカの影響が見られるが、ナラ枯れの発生、倒木などは認められず、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。ミズナラが優占する植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。カ剥皮防止ネットがウラジロモミに設置されており、シカによる被害、影響に留意する必要がある。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>鳥獣・病虫害被害が顕著であるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	千手ヶ原ミズナラ・ハルニレ 98.95ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>・西ノ湖畔ヤチダモ林木遺伝資源保存林（18.05ha）</p> <p>中低木や実生など、更新木の生育はほとんど認められず、シカによる食害が認められるが、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保護対象であるヤチダモの成木は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p>・千手ヶ原ドロノキ林木遺伝資源保存林（13.20ha）</p> <p>保護対象であるドロノキは、保護林周辺を含め、ハルニレやヤチダモなどとともに湿潤な立地環境に単木状で散在して生育していると考えられる。本来、ドロノキは、氾濫原や河川沿いに出現した裸地などに出現するという特性を有しているため、保護林内での自然更新は難しいものと評価される。シカの食害が認められるが、根際にシカ剥皮防止ネットが巻かれている。</p> <p>・千手ヶ原ミズナラ・ハルニレ植物群落保護林（67.70ha）</p> <p>シカの食害の影響を受け、中低木や実生など、更新木の生育はほとんど認められていないが、前回調査と大きな変化はなく、ミズナラ、ハルニレが優占する植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>鳥獣・病虫害被害が顕著であるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	西ノ湖ヒメコマツ・シロヤシオ 56.24ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>・西ノ湖マツ林木遺伝資源保存林（16.50ha）</p> <p>中低木や実生など、更新木の生育はほとんど認められず、シカによる食害の認められるものの、前回調査と比較して大</p>



		<p>きな変化は確認されていない。保護対象であるヒメコマツの成木は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。また、シカによる樹皮剥ぎで根際が腐朽しつつある株が多数確認され、斜面下部の一部では、獣害対策として、根際にシカ剥皮防止ネットを設置している。</p> <p>・西ノ湖ヤシオツツジ植物群落保護林 (39.74ha)</p> <p>尾根に成立しているブナ・ウダイカンバ群落の一部で上層木の立ち枯れやシカによる林床植生への影響があるものの、シロヤシオを含む植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>鳥獣・病虫害被害が顕著であるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	唐沢コメツガ 57.08ha	<p><b>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>ウラジロモミに対するシカによる食害の影響が強くており、一部でシカ剥皮防止ネットが設置されている。また、アカヤシオ、シロヤシオを含む植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価されている。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>鳥獣・病虫害被害が顕著であるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	那須街道アカマツ遺伝資源 41.81ha	<p><b>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>松枯れ対策が既に行われており、ほとんどのアカマツに松枯れ防止剤が注入されている。また、すでに枯損したアカマツを伐採したと思われる切り株がところどころにみられる。このため、保存対象樹種であるアカマツの高木・亜高木は、健全に生育し、遺伝資源保全上の大きな問題は生じていない。しかし、一部に活力の低下したアカマツが見られことや、林内に中木・低木の生育はないため、樹木の更新は行われていないものと判断される。低木層、草本層では他種が繁茂しており、アカマツ実生の生育を被圧しているため、仮に高木の枯損によるギャップが生じてもアカマツの更新は見込みが薄いと評価される。また、管理の手を緩めれば、将来的にはコナラ林へと推移していくと考えられる。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>鳥獣・病虫害被害が顕著であるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	赤谷山スギ遺伝資源 10.77ha	<p><b>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>高木層・亜高木層に生育するスギは健全に生育し、また、林内には、次世代を担う、スギの中木・低木・稚樹・実生の生育も認められ、本保護林の設定目的である、裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ被害が顕著である。胸高直径18cm以上のスギ28本中、樹皮剥ぎが</p>



		見られたのは14本（半数）。幹周に対する樹皮剥ぎの程度は、幹周20～40%程度が剥がれているものが多い。 <b>【モニタリング間隔】</b> 鳥獣・病虫害被害が顕著であるため、モニタリング間隔を5年とする。
希少個体群保護林	富士山六番ブナ 6.17ha	<b>【評価結果：平成26年度モニタリング結果概要】</b> 高木層においては、老齢のブナ・ケヤキと、カエデ類であるメグスリノキ、オオモミジ、オニイタヤなどが混在して生育し、本保護林の特徴であるブナとカエデ類が混在した混交群落形成されている。このため、本保護林の設定目的である、ブナ・カエデ類の混交群落の維持に問題は生じていないと評価される。しかし、シカ侵入防止柵の柵内外における植生調査の結果、柵内では林床植生の回復が進んでいることが確認されている。このことから、シカの食害が林床植生を衰退させ、本群落の更新木の生育を阻害していることは明らかであると評価される。 <b>【モニタリング間隔】</b> 鳥獣・病虫害被害が顕著であるため、モニタリング間隔を5年とする。
希少個体群保護林	浄蓮ウラジロガシ・アカガシ 37.35ha	<b>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】</b> 本保護林は、ヤマザクラ、アカマツなどの落葉高木の老齢木が残存する林相に、シイ・カシ類が混在し、極相状態へと近づきつつある林相を呈している。常緑広葉樹林への遷移の過程を示す林分としての価値が高いと考えられる。また、シカの食害が著しいため、常緑カシ類の低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、常緑カシ林としての更新が停滞している状況にあると評価される。さらに、本保護林内に残存しているアカマツの大径木については、薬剤注入による樹勢維持のための適切な対策が実施されていると評価される。 <b>【モニタリング間隔】</b> 鳥獣・病虫害被害が顕著であるため、モニタリング間隔を5年とする。

■ キ. その他、短期間で大きな変化が想定される保護林

<p>森林生態系保護地域</p>	<p>南アルプス南部光岳 3,247.99ha</p>	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・南アルプス南部光岳森林生態系保護地域 シカによる被害により下層植生への影響が認められるが、コメツガを主体とした天然林は健全に生育・更新しており、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</li> <li>・白倉林木遺伝資源保存林（55.23ha） 高木層・亜高木層を形成する針葉樹に、シカによる剥皮被害及び食害があるが、シラビソ、コメツガ、トウヒ等の亜高山帯性針葉樹からなる天然林は健全に生育・更新しており、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</li> <li>・中ノ尾根山の森林植物群落保護林（137.41ha） 保護対象であるトウヒやコメツガに枯損や倒木が認められるものの、天然性林は健全に生育・更新しており、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。シカによる被害、影響が懸念される。</li> </ul> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害等の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>生物群集保護林</p>	<p>奥鬼怒 2,585.35ha</p>	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>前回調査と比較して、シカによる被害の増加が見られたが、原生的な亜高山帯植生は健全に生育しており、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>生物群集保護林</p>	<p>上野檜原シオジ等 290.19ha</p>	<p>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】</p> <p>高木層・亜高木層においてシオジと同様の立地に生育する落葉高木が比較的多く生育してシオジと競合する状況にあるものの、シオジが優占して生育し、上層木のシオジは健全な状態で維持されている。しかしながら、林内の低木、草本層には、次世代を担うシオジの生育は少ない状況にある。上層などからの種子供給により自然更新のきざしは認められるが、発芽個体、実生、稚樹がニホンジカにより食害されている可能性が高いと考えられる。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、シオジ群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>

<p>生物群集保護林</p>	<p>愛鷹山 570.17ha</p>	<p>【評価結果：平成26年度モニタリング結果概要】</p> <p>高木層・亜高木層に生育するブナやスギ、尾根筋に分布しているアシタカツツジは健全に生育し、本保護林の設定目的である、ブナ・スギ・アシタカツツジの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、ニホンジカの生息密度が高いため、実生は生育しても、稚樹・低木への成育は妨げられ、更新樹種の生育に影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>生物群集保護林</p>	<p>富士山 1,027.09ha</p>	<p>【評価結果：平成26年度モニタリング結果概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・富士山大沢カラマツ・イラモミ・ウラジロモミ群落林木遺伝資源保存林（252.39ha）</li> </ul> <p>高木層・亜高木層に生育するカラマツ、ウラジロモミ、イラモミは健全に生育し、本保護林の設定目的である、カラマツ、イラモミ、ウラジロモミの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、ニホンジカの生息密度が高いため、実生は生育しても、稚樹・低木への成育は妨げられ、更新樹種の生育に影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・浅木塚ヒノキ群落林木遺伝資源保存林（20.43ha）</li> </ul> <p>高木層・亜高木層に生育するヒノキは健全に生育し、本保護林の設定目的である、ヒノキの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、ニホンジカの生息密度が高いため、実生は生育しても、稚樹・低木への成育は妨げられ、更新樹種の生育に影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。また、溶岩流上の土壌の薄い特殊な環境条件下に成立しているヒノキ群落の植物群落保護林としての観点からは、調査プロット2などのように現在の段階で中径木が密生して生育している林分では、今後は、種内競争による淘汰が活発化してくると考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・富士山亜高山帯植物群落保護林（680.19ha）</li> </ul> <p>本保護林には、垂直分布に応じて、カラマツ群落、シラビソ群落、ウラジロモミ群落からなる様々なタイプの針葉樹天然林が形成されている。このため、本保護林の設定目的である、針葉樹天然林の維持に問題は生じていないと評価される。ただし、ニホンジカの生息密度が高いため、実生は生育しても、稚樹・低木への成育は妨げられ、更新樹種の生育に影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・富士山東臼塚低山帯植物群落保護林（74.08ha）</li> </ul> <p>高木層に生育しているブナやミズナラの生育量は少なく、また、老齢木のブナについては枯損が進行し、植生の動態が顕著に認められる林相となっている。富士山におけるブナ帯の垂直分布域は、標高900mから1600mの範囲にあり、それより</p>

		<p>上部では針葉樹林帯へと移行する。本保護林の設定位置は、ブナ帯の上部にあたるため、ブナやミズナラの生育量は低標高地と比べて少ないことが推察される。このため、本保護林の設定目的である、ブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹と主とする天然林の維持には問題が生じていると評価されるが、低山帯上部における植生の動態を把握できる重要な保護林であると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>生物群集保護林</p>	<p>八丁池・皮子平 636.75ha</p>	<p><b>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・八丁池ブナ群落林木遺伝資源保存林 (252.58ha)</li> </ul> <p>保護対象樹種であるブナの老齢木に病虫害、気象害、虫害、動物被害等は見受けられず、現段階では健全に生育している。しかし、林内にブナの中齢木、低木・稚樹、実生は少なく、ブナ林の更新は停滞しているものと評価される。一方で、林内に占めるイヌシデ中齢木の割合は高く、このままブナの更新が停滞すると、将来的にはイヌシデ林へと偏向遷移するものと考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・皮子平ブナ・ヒメシャラ植物群落保護林 (4.06ha)</li> </ul> <p>高木層を構成するブナと亜高木層を構成するヒメシャラは健全に生育し、今後も、この2段構造の林相は維持されていくものと考えられる。ただし、林内に生育しているヒメシャラについては、やや樹勢の低下したものが認められ始め、今後は、幹径成長と樹幹伸長に伴う種内競争が活発化し、淘汰が行われていくものと考えられる。一方で、著しいシカの食害のため、低木層、草本ともに欠落し、ブナの低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、ブナ林としての更新が停滞している状況にあると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>生物群集保護林</p>	<p>秩父山地 2,145.46ha</p>	<p><b>【評価結果：平成28年度モニタリング結果概要】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・秩父山地生物遺伝資源保存林 (2,122.86ha)</li> </ul> <p>森林調査、植生調査の結果、前回調査と比較して大きな変化はなかったものの、前回に引き続いて林床植生が貧弱な状態のままとなっており、シカ食害による影響が続いている状態にあると評価される。オオシラビソについては、枯死木の殆どが胸高直径10cm程度の若い個体であったため、種内競争による淘汰とも考えられるが、シカによる剥皮の被害を受けている個体数が多いため、シカによる淘汰圧が大きいと考えられる。</p>

		<p>・ <b>十文字峠植物群落保護林</b> (22.60ha)</p> <p>毎木調査の結果、本保護林の保存対象であるコマツガ、シラビソ、トウヒなどを含む常緑針葉樹林は、上層木に大きな変化は見られず、また後継樹の生育も確保されていることから、今後も健全に更新していくものと推測される。ただし、シカの痕跡が多く確認され、付近の保護林内においてもシカの影響が強くていている箇所があることから、今後シカによる食害の影響がさらに強まることが懸念される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
生物群集保護林	丹沢山地 880.85ha	<p><b>【評価結果：平成28年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>今回の調査の結果、前回調査時から引き続いてシカによる食害の影響が強くていている状態で下げ止まっている状態にある。またその影響で、本保護林の主要な群落を形成するブナや、シデ類、カエデ類などの高木性の樹種の後継樹が育っていない状態にある。このため、シカによる食害の影響を排除しない限りは、本保護林の森林生物を保全するための基盤となるブナ群落を始めとした植生の衰退・消失を招く恐れがあると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	湯滝ミズナラ遺伝資源 13.18ha	<p><b>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>低木、実生など、更新木の生育はほとんど認められていないが、保護林は防鹿柵内にあり、保護対象であるミズナラの成木・中木は健全に生育しており、前回調査と比較して大きな変化は確認されていないことから、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。防鹿柵の設置効果により林床の植被率は高く保たれていることから、ミズナラの更新が停滞している理由は、シカによる影響が原因ではないと考えられる。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>シカ防止柵の内側にあり、柵の保全状況では短期間で大きな変化が想定されるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	竜頭の滝カラマツ遺伝資源 12.98ha	<p><b>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>今回の調査プロットにおいて、中低木や実生など、更新木の生育はほとんど認められていないが、前回調査と比較して大きな変化は確認されておらず、カラマツの成木は健全に生育しており、シカによる食害についても大きな変化はないことから、良好な状態で維持されていると評価される。しかし、保護林外でのプロット調査となるため、保護林の評価となるかは不明である。</p>

		<p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	光徳ハルニレ 11.74ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>前回調査と比較して大きな変化は確認されておらず、シカ防止柵内にあり、ハルニレが優占する植物群落は健全に生育しており、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカ防止柵の内側にあり、柵の保全状況では短期間で大きな変化が想定されるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	戦場ヶ原湿原 174.68ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>木道沿いには路傍雑草や外来種が見られるものの、湿原内は概ね良好な状態で維持されていると評価される。本保護林はシカ侵入防止柵の中にあるため、当面の間はシカによる影響は受けないと考えられる。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカ防止柵の内側にあり、柵の保全状況では短期間で大きな変化が想定されるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	小田代湿原 69.28ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>木道沿いには路傍雑草や外来種が見られるものの、湿原内は概ね良好な状態で維持されていると評価される。本保護林はシカ侵入防止柵の中にあるため、当面の間はシカによる影響は受けないと考えられる。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカ防止柵の内側にあり、柵の保全状況では短期間で大きな変化が想定されるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	高原山イラモミ 90.89ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>高木層の樹木に対しても新しい樹皮剥ぎ被害が見られ、土壌流出による根の露出も見られた。前回調査時に比べて、イラモミへのシカによる被害が拡大していると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	茶ノ木平ウラジロモミ 81.43ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>シカによるウラジロモミの樹皮剥ぎ被害の増加が認められるが、前回調査と比較して、生育しているウラジロモミの樹勢状態に変化はなく、後継木の生育も認められ、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p>



		シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。
希少個体群保護林	諏訪森アカマツ 10.79ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>前回調査と比較して大きな変化は確認されておらず、保護対象であるアカマツ老齢木からなる植物群落は健全に生育しており、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。また、継続的にマツ枯れ防止剤が注入されており、アカマツ老齢木は健全に生育していることが確認されている。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>病害対策を実施しており、実施状況によっては短期間で大きな変化が想定されるため、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	コガネ沢ブナ・イヌブナ 28.21ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>シカによる樹皮剥ぎ被害や食害が認められるが、ツガやモミなどの針葉樹林が広がっており、針葉樹に混在してブナやイヌブナなどの落葉広葉樹が生育している林相にある。保護林内で優占するツガ群落やモミ群落に大きな変化はなく、保護対象であるブナ・イヌブナも良好な状態で生育していると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害等の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	川上ツガ・ハリモミ 54.03ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>下層植生へのシカの被害が増加しているが、保護対象であるツガなどの針葉樹を主体とした樹林に、ダケカンバやブナなどの落葉樹が混在している天然性林は健全に生育・更新しており、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	岩岳山アカヤシオ・シロヤシオ 199.39ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>実生が確認されておらず、シカによる食害により林床植生が影響を受けていると考えられるがアカヤシオ、シロヤシオの生育木は健全である。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	京丸山キョウマルシヤクナゲ 37.49ha	<p>【評価結果：平成29年度モニタリング結果概要】</p> <p>シカによる食害により、スズタケはほぼ消滅し、林床は忌避植物のみが生育する状況にあるが、保護対象であるシロヤシオ、キョウマルシヤクナゲの成木・稚樹の生育が確認され、これらを含む植物群落は健全に生育しており、本保護林は良好</p>



		<p>な状態で維持されていると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	<p>深沢ヒノキアスナロ</p> <p>175.28ha</p>	<p><b>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>高木層を構成するヒノキアスナロに若干の枯損が見られ、高木層でヒノキアスナロと競合する高木類が多いものの、林内の亜高木、低木、草本層には次世代を担うヒノキアスナロの生育が認められ、保護対象であるヒノキアスナロ群落は健全な状態で維持されていると評価される。ただし、天狗巣病の発症が認められており、ヒノキアスナロ群落は単純な植生のため、天狗巣病の被害拡大が懸念されると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>病害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	<p>天丸山ヒノキ・ハコネコメツツジ</p> <p>119.35ha</p>	<p><b>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>高木層・亜高木層において競合する常緑針葉樹の生育は少なくヒノキが優占して生育し、上層木のヒノキは健全な状態で維持されている。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うヒノキの生育も少ない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、ヒノキ群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
希少個体群保護林	<p>元清澄山ツガ・ヒメコマツ遺伝資源</p> <p>170.29ha</p>	<p><b>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>尾根部においてはモミとツガが混交するモミ・ツガ林が分布し、斜面部においては、アラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシなどのカシ類が優占した常緑広葉樹林が分布しており保護対象群落であるモミ・ツガ・カシ類混交群落は健全な状態で維持されていると評価される。また、ヒメコマツについては、林木遺伝資源の保存のための個別個体管理が、千葉県、東大演習林、千葉森林管理事務所からなるヒメコマツ保全協議会により実施され、保全が図られていると評価される。キヨスミミツバツツジについては、本調査では詳細な情報については収集していないため、生育個体数や個別個体の生育状態については不明な点が多い。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>個別個体管理を実施しており、実施状況によっては短期間で大きな変化が想定されるため、モニタリング間隔を5年とする</p>

<p>希少個体群保護林</p>	<p>南房総モミ 5.56ha</p>	<p>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】 高木層はモミが優占した状態にあり、また、第2高木層や亜高木においては、ウラジログシ、アラカシなどのカシ類が優占した状態にあり、保護対象群落であるモミ・カシ混交群落の上層木は健全な状態で維持されている。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うモミ・ウラジログシ・アラカシなどの低木や稚樹は全く見られない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、モミ・カシ類混交群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。さらには、林床の植被率の低下により、急傾斜地では根の露出が進行しており、このまま裸地化が進行していくと、斜面崩壊に及ぶ危険性もあるものと評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】 シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林としてモニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>希少個体群保護林</p>	<p>上佐野スギ・ブナ・イヌブナ 19.82ha</p>	<p>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】 森林調査の結果、保存対象種であるスギの精英樹や、高齢級のブナやイヌブナなどの上層木は健全な状態で生育している。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による影響が著しく、林床植生が衰退し、次世代を担うスギ、ブナ、イヌブナなどの稚樹や実生も少ない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、スギ群落やイヌブナ群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】 シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>希少個体群保護林</p>	<p>安倍峠オオイタヤメイゲツ 9.96ha</p>	<p>【評価結果：平成25年度モニタリング結果概要】 高木層を形成するオオイタヤメイゲツに若干の枯損が見られたが、高木層～亜高木層までオオイタヤメイゲツが優占した状態にあり、オオイタヤメイゲツの大木も良好な状態で生育していることから、保護対象であるオオイタヤメイゲツ群落の上層木は健全な状態で維持されていると評価される。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うオオイタヤメイゲツの生育は少ない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、オオイタヤメイゲツ群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。また、シカの食害による林床植生の衰退により、裸地化の進行に伴う土壌流出、さらには、それが引き金となり、斜面崩壊に及ぶ危険性もあるのではないかと考えられる。</p> <p>【モニタリング間隔】 シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>

<p>希少個体群保護林</p>	<p>富士山壩塚ウラジロモミ 4.84ha</p>	<p>【評価結果：平成26年度モニタリング結果概要】</p> <p>高木層においては、針葉樹であるウラジロモミと、落葉樹であるサワグルミ、ブナなどが競合しつつ生育し、本保護林の特徴である針広混交林が形成されている。このため、本保護林の設定目的である、針広混交林の維持に問題は生じていないと評価される。本保護林では、ブナ老齢木の枯損が認められることから、今後は、常緑針葉樹であるウラジロモミがより優勢となり、ウラジロモミ林へと推移していくものと考えられる。しかし、ニホンジカの食害が著しいため、林下のウラジロモミ低木、稚樹・実生は僅かであり、植生の動態を妨げていると推察される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林としてモニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>希少個体群保護林</p>	<p>皮子沢モミ 11.26ha</p>	<p>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】</p> <p>最上層を構成するモミは高齢から老齢木が多いことに加え、多くのものがテイカカズラやツルアジサイにより被圧され、樹勢が低下しつつあるものや、既に衰弱して幹折れを起こしているものが見受けられる。また、シカの食害が著しいため、モミの低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、モミ林としての更新が停滞している状況にある。現在上層に生育しているモミがつる植物の被圧により枯損し続ければモミ林としての存続が危ぶまれ、雑多な樹種が混在した林分へと後退していくものと評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>森林の状況、シカの食害報告等から、短期間で大きな変化が想定される保護林としてモニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>希少個体群保護林</p>	<p>しらぬたの池モミ・スギ 39.96ha</p>	<p>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】</p> <p>上層を構成するモミ、スギは現段階では健全に生育しているが、高齢から老齢木が多いことに加え、既に枯損しているものが見受けられる。また、シカの食害が著しいため、モミの低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、モミ林としての更新が停滞している状況にある。現在上層に生育しているモミがさらに枯損し続ければモミ林としての存続が危ぶまれ、雑多な樹種が混在した林分へと後退する可能性があるとして評価される。また、モリアオガエルの繁殖環境として重要な、しらぬたの池の周辺環境については、池側面の斜面からの傾倒枝は好適な状態で水面上に張り出しており、モリアオガエルの産卵環境として機能していると評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】</p> <p>森林の状況、シカの食害報告等から、短期間で大きな変化が想定される保護林としてモニタリング間隔を5年とする。</p>

<p>希少個体群保護林</p>	<p><b>寒天モミ</b> 11.29ha</p>	<p>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】 最上層を構成するモミは高齢から老齢木が多いことに加え、既に衰弱して幹折れを起こしているものが見受けられる。また、シカの食害が著しいため、モミの低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、モミ林としての更新が停滞している状況にある。現在上層に生育しているモミがさらに枯損し続ければモミ林としての存続が危ぶまれ、雑多な樹種が混在した林分へと後退していくものと評価される。なお、また、ヤブツバキクラス域との移行帯に特異的に生育しているブナについては、現段階で生育は良好と評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】 森林の状況、シカの食害報告等から、短期間で大きな変化が想定される保護林としてモニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>希少個体群保護林</p>	<p><b>長九郎シャクナゲ</b> 7.38ha</p>	<p>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】 キョウマルシャクナゲの生育地は、常緑広葉樹であるアカカガシの優占する林下にキョウマルシャクナゲが密生して生育している林相にある。このため、キョウマルシャクナゲの生育状態は良いとは言えず、開花・結実する個体も少ないと評価される。さらには、林内においても、他の常緑広葉樹と競合しており、林下においては、シカによる食害も見られて、稚樹・実生も少ないのが現状である。このため、次世代を担うキョウマルシャクナゲの生育は停滞しているものと評価される。</p> <p>【モニタリング間隔】 森林の状況、シカの食害報告等から、短期間で大きな変化が想定される保護林としてモニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>希少個体群保護林</p>	<p><b>黄楊の峯ツゲ</b> 18.85ha</p>	<p>【評価結果：平成27年度モニタリング結果概要】 ツゲの生育地は保護林の北部に限られているが、ツゲの生育地においては、ツゲは、シカによる強度の食害を免れ、良好に生育していると評価される。ただし、保護林内に広く分布しているブナ林については、一部の稜線で枯損の進行が著しく、また、シカによる食害の影響のため、次世代を担うブナの低木や稚樹がほとんど生育していないのが現状である。</p> <p>【モニタリング間隔】 森林の状況、シカの食害報告等から、短期間で大きな変化が想定される保護林としてモニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>希少個体群保護林</p>	<p><b>西丹沢ブナ</b> 225.10ha</p>	<p>【評価結果：平成28年度モニタリング結果概要】 神奈川県「第3次神奈川県ニホンジカ管理計画」によると本保護林を含む地域は、丹沢大山地域周辺の中では比較的シカの被害が少ない場所となっている。しかしながら、今回及び前回の森林調査結果によると、林床のササの被度の低下や高さの低下が認められ、シカによる食害の影響が大きくなっているということが示唆される。また、保護林内の群落を構成する主要な樹種のブナの更新も難しい状態にある。このため、シカによる食害の影響を排除しない限りは、本保護林及び周辺</p>

		<p>のブナ群落の衰退・消失を招く恐れがあると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>
<p>希少個体群保護林</p>	<p>西丹沢モミ 50.31ha</p>	<p><b>【評価結果：平成28年度モニタリング結果概要】</b></p> <p>高木層を形成する老木のモミや、ブナ、ミズナラなどの樹勢状態は良いものの、後継樹の生育状態が悪く、また林床のスズダケの被覆が低下している状況にある。シカによる食害の影響と考えられ、今後さらに草本層植被率が低下する傾向が続くと、群落の更新が止まり、モミ群落の崩壊を招く危険性があると評価される。</p> <p><b>【モニタリング間隔】</b></p> <p>シカによる食害の報告があり、短期間で大きな変化が想定される保護林と判断し、モニタリング間隔を5年とする。</p>